

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属： 学長

名 前： 松本充右

作成日：2026 年 5 月 16 日

教員氏名：松本 充右

所属：学長

1. はじめに

昨今、大学の教育については単位の実質化や教育の質保証と教育成果の公表など教育に対する責任や外部に向けての説明責任が求められている。大学教員の職務には教育、研究、学内業務など様々な役割があるが、これまで大学教員は研究者としての研究業績や論文数で評価されることが多く、教育については講義内容、教科書の選定など教員の裁量に応じて比較的自由に教育が行われてきた。多くの大学では学生による事業評価を行なっているが、授業の内容についての経年的には変化については授業評価だけで改善することは難しくなっている。ティーチングポートフォリオを作成することで、教員自身がシラバスや授業評価に加えて、教育活動全般について網羅的に振り返ることができる。九州ルーテル学院大学では 2020 年度からティーチングポートフォリオの作成をしているが、当初はティーチングポートフォリオの目的や活用方法について十分なコンセンサスや理解が進まなかった。その後、ティーチングポートフォリオに関する研修会を実施し理解を深めてきた。

2. 教育の責任

九州ルーテル学院大学での私の教育責任は学長・学部長として教学全般を統督することが主な責任である。学長としての職務意外にもキャリア・イングリッシュ専攻の専門科目と共通教育の英語関係の科目を担当している。

(1) 授業科目の担当

「映画英語」 共通教育 2 年後期

「基礎英文法」 キャリア・イングリッシュ専攻 1 年前期

■ 主要授業科目

無し

■ 非常勤講師

無し

(2) 教育組織運営

学長・学部長であるため直接学生を教える機会は少ないが、学部全体のカリキュラム全体に目配せしている。また、現在の学科専攻再編ワーキンググループ座長の時に手をつけるこ

とができなかった、共通教育科目の抜本的な見直しの必要性を感じている。共通教育部会長には改革の着手を指示している。

3. 教育の理念

(1)理念1

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々な場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には他者に感謝し、他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を4年間で行うことが本学の教育理念であると考えている。

(2)理念2

母語である日本語でも外国語である英語であっても、自らの意見をしっかりと発言・発信できるための指導や教室環境が必要と考えている。これは私の米国留学での経験から起因しているが、米国の大学の授業では指名されていなくても教師の発言や説明に対して、疑問や意見がある場合、周りの空気を読まずに挙手をし、どんどん質問し、自らの意見をはっきりと述べる場面に数多く遭遇した。日本人は人前で発表・発言する訓練（パブリック・スピーキング）を受けていないため、発言を躊躇し、指名されても隣の友人に相談してから小声で自信なさげに答えることが多い。本学の授業の多くは少人数で行われることが多いため、他者の意見を尊重しつつも、自分の意見をはっきりと日本語でも英語でも発言・発信する機会を増やすことで、人前で発表・発言するスキルを向上させる教育を実践したいと考えている。

(3)理念3

著名な第二言語習得論者である S・クラシェンが外国語習得に必要なインプットとして $i+1$ という定義を提案している。 i は現在の外国語のレベルを指し、 $+1$ はそれよりも少し難しいインプットを意味している。使用する教科書や教材が日本語で書かれたものであれ、英語であれ、可能な限り学生にとって難しくチャレンジできるものを使用するように心がけている。学生にとって多少歯応えがあり難しい教材を使用することで、教える側の教師も教わる側の学生も予習復習などが（特に英語で書かれている教材の場合は）大変になるが、学生の潜在能力を引き出すためにもやりがいのある教材にしっかりと取り組むことの方が学生の記憶にも留まり学習効果が高まると思っている。

4. 教育の方法

(1) 英文で書かれたテキストや配布資料の使用

キャリア・イングリッシュ専攻の英語を学ぶ科目はもちろんのこと、言語学・英語学関係専門科目においても可能な限り英語のテキストや教材を使用し専門的な内容も英語で読み理解

できるようにチャレンジして欲しいと思っている。その際には英文教材を英文解釈する授業に終始してしまう危険性もあるため、「英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ」を意識し英文教材をさらに細かく解説したパワーポイントのスライド資料を配布して理解が進むように配慮している。

(2) 動機付けを高めるストラテジー

学生の学びに向かう意欲をどのようにしたらより引き出せるかは、教師にとって大きな課題である。共通教育科目である「映画英語」は映画という身近で親しみやすい教材を使って以下の効果的に英語を学ぶことができるかを模索してきたが、オーセンテック（本物の）な英語の触れることで学生の英語に対する学習意欲は高まっていると実感している。また英語そのものを学ぶだけではなく、英語圏の文化と日本の文化や生活様式の違いなど異文化理解に関する説明も多く取り入れて、映画を通した異文化理解も教えるように工夫している

5. 教育改善のための努力

(1)改善努力 1

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善すべき点は真摯に学生の声に耳を傾け改善するようにしている。学生のコメントには的外れなコメントもあるが、教員には気付くことができない意外な改善点を指摘されて眼から鱗の場合もある。改善すべきと思われることは授業改善報告書に記載し、翌年度に改善するようにしている。

(2)改善努力 2

英語学関係の専門領域については、英語教育の学会に参加して、他の大学教員の実践的な研究の事例発表などを参考にし、自分の授業に生かせると思われる新しい研究成果を取り入れるようにしている。

6. 教育の成果・評価

2026 年度は前担当者の都合により急遽「基礎英文法を担当することになった。依頼が昨年度末であったため、現在は授業の資料を作成しながら次の授業に備えているといった自転車操業である。その一方で英文法は英語の4技能の基盤となる大切な知識であるため、疎かにできない。今年度 1 年間のみの担当であるが授業の準備はしっかりと行い良い授業を行いたい。共通教育科目の「映画英語」は年々受講者が増えてきている。授業名に惹かれて登録した学生もいると思うが、英語学習の動機づけとしては映画を使うことは効果的であり、また学生にとっては理解しやすかったようである。

7. 今後の教育に関する課題と目標

授業を通して学生に教育する機会は少ないが、本学の学生が在学中にどのような学びをしたのかについて DP 到達度指標や卒業生アンケートなどを通してアセスメントをしていきたい。その上で、常に教育改善をリードしていきたいと思っている。